

# 訳注『出雲名勝摘要』（四）

要 木 純 一

## ○猪石

意宇郡、宍道村二二石アリ。一ハ長サ二丈七尺、高サ一丈、周回五丈七尺ニシテ、一ハ長サ二丈五尺、高サ八尺、周回四丈一尺ナリ。神代、大己貴命獵リセント欲シ、野ニ出テ、猪ヲ逐フ。其猪走り逃ケ、佐為谷ニ至リ、化シテ石ト為ル。是レ即チ其石ナリ。形チ絶々類似ス。村名ヲ宍道ト曰フハ、ソレコレニ由ルカ。

【訳】意宇郡、宍道村に二つの巨石がある。一方は、長さが二丈七尺（約八・二米）、高さが一丈（約三・〇米）、ぐるりが五丈七尺（約十七・二米）。もう一方は、長さが二丈五尺（約七・六米）、高さが八尺（約二・四米）、ぐるりが四丈一尺（約十二・四米）である。神々がいた古代、オオナムチ（大国主命）が狩獵をしようとして、原野に出陣して、いのししを追跡した。そのいのししは走って逃げて、佐為谷にたどりついたところで、石に変わった。それがこの猪石である。その形は確かに非常にいのししに似ている。村の名前が宍道Ⅱいのししが通った道というのも、この猪石の故事に由来するのであろうか。

【注】猪石―『出雲国風土記』意宇郡・宍道郷「宍道郷。郡家の正西卅七里なり。天の下造らしし大神の命の追ひ給ひし猪の像、南の山に二つ有り。（一は長さ二丈七尺、高さ一丈、周り五丈七尺。一は長さ二丈五尺、高さ八尺、周り四丈一尺。）猪を追う犬の像。（長さ一丈、高さ四尺、周り一丈九尺。）其の形は石と為りて、猪と犬とに異なる無し。今に至るまで猶お在り。故に宍道と云う」。本文の記述はほとんどこれを襲っている。数値に至ってはそのままである。猪石が現在のどこに当たるかは、石宮神社（犬石の項に詳述）入り口の巨石や女夫岩（めおといわ）遺跡等の説があるが、挿絵の猪石図から見て、本書では、女夫岩遺跡とみなしているようである。女夫岩遺跡は、通称「ししいわさん」。二つの石からなる、古代巨石信仰のあとと考えられている。（『宍道・女夫岩遺跡』一九九九年 島根県教育委員会・宍

道町教育委員会発行 参照) ただ、現在の所在地は松江市宍道町白石であり、明治初めは、石宮神社と同じく白石村にあったというべきである。白石村經由ではなく、宍道村(当時)經由で行く場合が多かったので混乱したのか、あるいは、どうしても『風土記』の宍道郷と一致させて、宍道の地名由来伝説に結びつけたくて宍道村としたのか、不明。意宇郡―旧郡名は、前注のごとく、『出雲国風土記』に見える。明治十二年、近代の行政区画としての意宇郡成立。鳥根秋鹿意宇郡役所が秋鹿郡とともに統治。明治二十九年、新たな郡制施行により、秋鹿郡と合わせて、八東郡成立。宍道村―江戸時代から明治初期に宍道村があった。本書発行よりも後、明治二十二年、町村制施行により、意宇郡白石村・宍道町・宍道村・佐々布村・伊志見村の区域をもって宍道村が発足した。二石―女夫岩遺跡は、二つの石が左右に密着して並んでいる(間には太い樹木が挟まって成長している)。挿絵の猪石図は、不審なことに、その左側の石一体しか描いていない。元の図を真ん中から半分に切って印刷してしまったのだろうか。この絵の背景は木がまばらで、草地のようであるが、現在の女夫岩はうつそうとした森の中にある。挿絵を描いた妹尾春江が、果たして実物をスケッチしたのか、人を介した情報で書いたのか、不審。明治の初めまでは、里山は、木を薪等に使うので、はげ山だったというが。長サ二丈―以下、訳では、普通の尺貫法でメートルに換算してみた。どれだけ正確に測ったのかわからない、千数百年前の『風土記』の記述を襲っただけなので、細かな数値にこだわるのはナンセンス。『風土記』の度量衡は現在のものとは違うという説もある。先の報告書によれば、女夫岩遺跡の、北側の石は、長さ九米、幅二・五米、高さ四米以上。南側の石は、長さ六米、幅三米、高さ四・五米以上。大体一致すると考えてよいのではないか。神代―または、「かみよ」。漢文訓読調の文章なので、音読みをした。人の世に先立つ時代。神武天皇以前。大己貴命―大國主命の数多くある異名の一つ。『日本書紀』や『古事記』にあらわれる。出雲国風土記では、「大穴持」、「天の下造らしし大神の命」としてあらわれる。狩猟をして猪を追うのは、軍神としての側面か。野二出テ、―「出野」はおそらく和製漢語。『古事記』「其の父の大神者。已に死に訖ると思ひ、其の野に出で立つ」。猪ヲ逐フ―魏徴・述懐「中原に還た鹿を逐う」。走り逃ゲ―中国語においては、文語「逃走」に対して、「走逃」は近世俗語的。『醒世恒言』白玉娘忍苦成夫「只是心中記掛著丈夫、不知可能夠脫身走逃」。佐為谷―現松江市宍道町白石地区の一部。江戸時代は才谷と表記された(才の神⇨サ

ルタヒコと関係があるか)。南側の山に、佐為神社がある。『風土記』の狭井社、同狭井高守社がこれに当たるといわれる。出雲路幸神社(安来市西松井町)に比定する説もある。『延喜式』神名帳には佐為神社とある。ただ、女夫岩遺跡は、才谷の西側かなり遠くに位置して、しかも高所にあるので、何らかの誤解があるものと思われる。ソレコレニ由ルカ―『礼記』樂記「教之不刑、其此之由乎」等の言い方をまねた。

42

島多豆夫しまたずお

大神おおかみの御狩みかりのあとをしのふれは猪像ほししかななせる石はありけり

【訳】オオナムチの神様が狩をなさったあととはどこであろうかと慕って探しに行ったら、伝説通り、イノシシの形をしている石があったことだよ。

【注】大神―神を崇め奉った言葉。古代風。万葉調。『万葉集』「おほかみのいはへるくにそ」。御狩―神や天皇の挙行した狩猟を敬った言葉。柿本人麻呂「日並皇子の命の馬並めて御狩立たしし時は来向ふ」。西行『山家集』「この里や嵯峨の御狩のあとならん野山もはてはあせかはりけり」。あとをしのふれは―式子内親王「住み慣れし跡を忍ぶる嬉しさに漏らさず掬ふ身とは知らずや」。なせる―動詞「なす」の已然形+完了の助動詞「り」の連体形。なす+ありの縮約型。歌語としてはこなれないが、源順「鳴く虫の涙になせる露よりも露吹き結ぶ風はまされり」等の用例はある。柿本人麻呂「沖つ波来寄る荒磯を敷栲の枕とまきて寝(な)せる君かも」は、語彙も文法も違うが、古代風としてまねたのかもしれない。石はありけり―「けり」は発見の驚きを込めた詠嘆の助動詞。在原行平「嵯峨の山みゆきたえにしせり河の千世のふるみちあとは有りけり」。さらに、時の推移に対する(伝説の昔は去った)感慨も含まれている。\*当時は宍道の町から、はるばる奥深い山の中を訪ねていく感覚があっただろう。やっと、目指す猪石が見つかって、いよいよ歌会を始めようという第一首だと思われる。『出雲名所摘要』所収の作品のほとんどは、実地で詠まれたものだ、注者は考えている。

八千矛やちほこの神かみのおはしし、しし、かたはいま今も六道むちの郷こに残れり

【訳】多くの武器を携えたいさましいオオナムチの神が追いかけられたイノシシ、そのイノシシが変化した石は、いまでもその名もししじ（イノシシの走つた道）のさとに残っている。

【注】八千矛—大國主命の別称。『古事記』に見える。多くの矛という意味から、軍神・武神としての神性を表していると思われる。『古事記』「この八千矛の神、高志の国の沼河北売を婚（よば）はむとして幸行（みゆき）いでます時に、その沼河北売の家に到りて歌よみしたまひしく、「八千矛の神の命は八島国妻枕（ま）きかねて・・・」、『万葉集』田辺福麻呂歌集「八千矛の神の御代より」。おはしし—動詞（五段活用）「お（追）ふ」未然形＋上古尊敬の助動詞（五段活用）「す」連用形＋過去の助動詞「き」の連体形「し」。「し」音を繰り返して、次の「ししかた」を呼び起こし、さらに「六道」の「しし」につなげる。『古事記』雄略「やすみししわが大君のあそばしし猪（しし）の病み猪のうたき畏み我が逃げ登りしあり丘の榛の木の子」の「し」、「しし」の連続をまねたのであろう。また、『万葉集』三三四五「葦垣行く雁の翅（つばさ）を見るごとに君が佩（お）ばしし（君之佩具之） 投箭（なげや）し思ほゆ」の「おばしし」は意味と清濁が違うが、狩りの描写における古代的措施として意識し、利用したのではないか。ちなみに、この歌は、『万葉集』の前首三三四四の反歌であり、この長歌も意識していたかもしれない。「何処にか君が坐さむと天雲の行きのまにまに射（い）ゆ鹿猪（しし）の行きも死なむと思へども道の知らねばひとり居て君に恋ふるに哭（ね）のみし泣かゆ」。

今も・・・残れり—藤原実頼「池水に国栄えける纏向（まきもく）の珠城（たまき）の風は今ものこれり」。

\*猪石到着後の興奮も落ち着いてきて、石から古代伝説の世界が浮かび上がってくる。鳥多豆夫の歌と同趣旨だが、出雲神話という不可解、不合理な世界を、どうやって目の前の現実と折り合わせようか、考えあぐねている。神話の实在を眼前の石で証明し、納得しようとするこれまた不合理な思考回路。そもそも、大國主命は、獲物として猪をとらえたのだから、その猪が石になっているのはおかしいではないか。

大神の御狩におちて猪石は佐為谷に社たちひそみけれ

【訳】 オオナムチの神が直々に行ったご狩猟におびえ恐れて、一石に変わった猪石がいまも佐為谷にこっそり隠れて存在しているのだなあ。

【注】 おちてーおつ。恐れてはばかる。『土佐日記』「紅濃くよき衣着ず、それは海の神におちて、『源氏物語』若紫」をさなき心地にも、いといたうもおぢず」。歌語としてはあまり用いない。佐為谷―前述のように猪石（女夫岩遺跡）からかなり離れており、何か誤認があるようだが、わざと谷のことにして、「たちひそむ」感じを強めた作為かもしれない。佐為谷に隠れていたイノシシが、大國主命に見つけられて、追われて今の地まで来たというような解釈は、歌として面白くないであろう。社―諸説あるが、「こそ」はもともと祈願の助詞であるから、祈願する対象である神社も「こそ」とよばれ、係り結びの助詞にもこの字があてられたのであろう。万葉集「昔者社（むかしこそ）難波いなかと・」。たちひそむ―用例を見ない。おそらく造語。単純にそのまま硬直したように立って隠れる意味か。あるいは、「たちかくる」、「たちしのぶ」等からの類推か。その場合、「たち」は強調。「それまでと打って変わって」のような雰囲気もあるか。雅縁「あはれ誰がしづまるほどをまちかねてかためぬかどにたちしのぶらむ」。大伴坂上郎女「佐保川の岸のつかさの柴なかりそね ありつつも春し来たらば立隠がね」。壬生忠岑「人のみることをやくるしきをみなへし秋ざりにのみたちかくるらん」。『今鏡』五節太刀「やぶられてたちしのぶべきかたぞなきみをぞたのむかくれみのかぜ」。「たちしのぶ」が人目をしのんでひっそりと隠れる感じであるのに通じるか。

\*猪が捕らえられたのに、石として残っているという伝説の不合理に対して、いや猪は逃げおおして、今もここに潜んでいるんだよと、これまた不合理な理屈で答えて、締めくくる。伝説の地を前にして、このように詠むことによって、不合理ゆえに我信ずの、他では得られない、独特の境地に達するのである。

○月山城墟

やまノ古名ヲ勝日山ト曰フ。能儀郡、富田村ニアリ。往昔、平景清ノ築クトコロニシテ、建武中、塩冶高貞之レニ居ル。文明ノ頃、尼子經久勃興シテ之ニ拠リ、竟ニ中国ニ雄視セリ。永祿年間ニ至リ、晴久、義久、毛利氏ノ困ヲ受クト雖トモ、堅城利兵ニシテ、能ク七年ノ久キニ耐フ。其後チ年ヲ経テ、堀尾氏ニ至リ、之レヲ島根郡、末次ニ移ツス。満山皆楓樹ニシテ、爛然ト霜ニ飽ク、其色渥丹ノ如シ。故ニ高秋ニ至レハ、名士ノ之レヲ探クルモノ多シ。

【訳】月山は、かつて勝日山という名前だった。能義郡富田村にある。その昔、平景清が築いた城で、建武年間（一二三三—一二三六）、塩冶高貞がここを本拠地とした。文明年間（一四六九—一四八六）、尼子經久が勢力を伸ばしてここを根城として、最後にはなんと中国地方全体を支配下におさめ、にらみを利かせた。永祿年間（一五五八—一五七〇）になると、後継の晴久、義久は、この城を毛利氏に包囲されたが、堅固な城壁、優れた武器があつたので、七年間の長きにわたって、持ちこたえることができた。その後、何年もたつてから、堀尾氏の時代になると、この城を島根郡の末次（すなわち今の松江城）に移した。山全体が、もみじに覆われ、霜が十分に降りると、燃えたようになり、つやのある濃厚な赤色を呈する。というわけで、天高く晴れ晴れとなつた秋になると、高雅な趣味を持つ、著名な風流人がこの地をたくさん訪れてきた。

【注】月山—島根県安来市広瀬町富田にある。戦国時代の尼子の居城として著名。以下、この項が直接間接に拠つていられると思われるので、江戸時代の月山についての記述として、松江藩初代藩主松平直政に重用された、藩儒黒澤石斎の旅行記『懐橋談』意宇郡附能儀郡の条を引く。「能儀郡また能義郡といふ。．．．富田 富田今は能儀郡なり。此所に古墟あり。古老伝えて云ふ。昔患七兵衛景清初て築きし城なりと。此地に八幡の社ありしを、景清祈りて曰く、爰に城郭を築かんと思ふが、願くば神社壇をかへ給はんや、否やと鬪を取りしに、遷座ましまさんと鬪を取りて大いに悦び、白羽の矢を闇夜に虚空を射て、矢の落ちたる所に社を建立し奉らんと誓ひて射ける程に、其矢の落ちたる所に社を建て侍りぬ。今の富田の八幡是なり。彼白羽の矢今に伝へて神宝の第一とす。曆応の比塩冶判官高貞も此城に居住し、後醍醐天皇に奉りし月毛の龍馬も、此所より出でたりとぞ。明徳年中に佐々木治部少輔高範此国を領し、塩冶駿河守も此城を守りぬ。尼子氏も世々此城に住せり。尼子左衛門尉晴久卒して子義久家を嗣ぐ。然るに義久驕甚し。．．．（以下、毛利元

就の調略により落城したことを述べる。また、山中鹿之助の活躍を描く。義久心たゆみて終に和睦し、翌日義久城を出で給へば、六戸熊谷両人に預けらる。吉川元春は雲伯両国の守護として、此の富田の城におかせ給ふ。其年の暮に元就藝州に凱旋し給ひ、尼子にも采地少々宛行はれけりとぞ聞えし。抑天文年中に鉄砲我朝に渡り、漸く国々に流布しける。然るに此城は弓の術計りにて鉄砲には便りよろしからずとて、慶長年中に当国の守護堀尾帯刀高階吉春、子息出雲守忠氏と相議して、此城を松江へ移し侍りけるが、忠氏早世して祖父吉春嫡孫山城守忠晴と共に、慶長十三年に松江の城へ移り給ふ程に、富田の城は、草のみ生ひ茂りて野人の住家となり侍るを見て、富田古墨起秋風、村老銷兵今事農、到此諸郎論地利、人和不識有新功と口に任せて吟じ侍る。城墟しろあ。中国では、「城」は城壁に囲まれたまちのこととて、荒れ果てたまちのあと、すなわち廢墟に同じだが、ここは日本のいわゆる「城」である。勝日山―現在の月山の古名。『出雲国風土記』に「加豆比乃社」、「加豆比乃高守社」が載せられていて、それぞれ月山のふもと（または中腹）と頂上にあつたと推測され、上古から勝日山と称せられていたものと思われる。『懷橘談』にあるように、伝説では、やがて「加豆比乃社」は八幡社となり、さらに平景清が月山城を立てるにあつて、今の富田八幡神社の地に移された（現在は勝日神社が境内にあつて、合祀の形になつてゐる）。そして現八幡神社のある山が、勝日山の名に変わつてしまつた。なお、月山頂上の加豆比乃高守社は保持されたく、勝日高守神社として現存する。「月山」の名の由来は、麓の当時の広瀬の町（江戸時代洪水で廢棄）から見て、月が出る方向だつたからであろう。月山の山頂（勝日高守神社）は、吐月峰とも呼ばれた。はじめは「つきやま」と訓読みで呼ばれていたのかもしれない。「がつさん」と呉音漢音混用で読むのは不思議だが、これは古代から著名だつた、出羽三山のうちの月山（がつさん）の読みを借用したのであらう。旧名「かつひやま」の「かつ」に合わせようという気持ちもあつたか。山名の由来や変遷は確実なことはわからないが、以上述べた音の類似等は、この項の和歌・俳諧を詠むうえで考慮しなくてはならないだろう。能儀郡―『懷橘談』にあるように、能義郡とも書く。『風土記』意宇郡所載の「野城駅」に由来するらしい。近代は明治十二年に、広瀬町、安来町、母里村等数十町村の行政区画として、能義郡が成立し、郡庁が広瀬町に設けられた。現在では全域が安来市になつた。富田村―月山富田城といわれるように、富田の地名は古くからあつたが、明治八年、牧谷村・山形帳村・新

宮村が合併して富田村となり、十二年、能義郡管轄。二十二年、広瀬(町)、広瀬村等と合併して、広瀬町が発足。現安来市。平景清―平安時代から鎌倉時代の武士。生没年不詳。藤原秀郷子孫伊勢藤原氏(伊藤氏)藤原忠清の子。源平の争いで平家に味方したため、俗に平景清と呼ばれる。その武勇から悪七兵衛の異名を持つ。壇ノ浦の戦い後捕えられて、自ら断食して死んだとされる。実在の人物だが、事績が不明な部分が多く、能、浄瑠璃(近松門左衛門『出世景清』)、歌舞伎の主人公に仕立てられる。また、各地の伝説の題材となった。保元・平治頃、平景清が富田荘に来た時、八幡社を移して、築城したという伝承がある(先述の『懐橘談』参照)。塩冶高貞―?―一三四一。鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての武将。出雲守護として、後醍醐天皇の拳兵に呼応し、鎌倉幕府との戦いに貢献する。建武の新政のちは、足利尊氏に味方し、南朝方制圧に力を奮ったが、一三四一年三月に京都を出奔すると、謀反として北朝に追討され、同年翌月出雲国で自害した。『太平記』によると妻に横恋慕した高師直の陰謀によるという。この悲劇を利用したのが、『仮名手本忠臣蔵』で、浅野長矩は塩冶に、吉良義央は高に仮託されている。尼子経久―一四五八―一五四一。戦国時代の武将。尼子氏は宇多源氏佐々木氏の流れを汲む京極氏の分家。近江国甲良荘尼子郷に居住していた高久(佐々木道誉の孫)が尼子を称する。その子孫は、京極家の出雲守護代をつとめ、出雲に土着、富田城に拠った。経久も父清定を継ぎ出雲守護代となった。権力を拡大し、徴税拒否で一時追放されたが、一四八六年(文明一八)守護京極政経の上洛後、事実上出雲の支配権を握った。山陰、山陽に兵を動かし、勢力は十一か国に及び、尼子氏の最盛期を築いた。安芸で大内氏と戦い、一五二五年、配下の毛利元就が大内氏に属したのは毛利氏とも戦う。子政久陣没のため一五三七年隠退後も孫晴久を後見した。尼子晴久―一五一四―一六〇〇。戦国時代の武将。父政久早世のため祖父経久より出雲を中心とする山陰の支配権を継承した。四〇年、大内氏と結んだ毛利元就の居城安芸郡山を包囲したが、翌年毛利・大内勢の反撃に敗走した。四二年、逆に大内義隆に出雲に侵入されたが、富田城に拠って防戦し、翌年撃退した。尼子義久―?―一六一〇。戦国時代の武将。一五六〇年(永祿三)父晴久の死により出雲守護を継ぎ、毛利氏との戦闘を継続した。六二年、大森銀山が落ち、毛利勢が出雲に侵入すると、国人層は相次いで離反した。翌年、支城白鹿城が落ち、富田城に孤立し、三年の籠城戦の末、六六年(永祿九)十一月、毛利氏に下った。弟倫久、秀久とともに安芸長田

円明寺に幽閉され、のち毛利氏の客分となる。子孫は佐々木姓に復し、毛利氏家臣として存続した。七年―不審。籠城戦自体は三年。父晴久の時代から続いた毛利との攻防戦全体をさすか。堀尾氏―堀尾吉晴。一五四三―一六一一。戦国、江戸時代前期の武将。はじめ豊臣秀吉の家臣。小田原攻めに功をたて、遠江浜松城主となる。一五九九年隠居。一六〇四年、松江藩主堀尾家初代である子の忠氏が死去したため、二代をついだ六歳の孫忠晴を補佐し、松江城を築城し、広瀬城から本拠地を移した。松江城は、本書に既出。現在の島根県松江市殿町に築かれた江戸時代の日本の城。別名・千鳥城。現存太守は国宝、城跡は国の史跡に指定されている。島根郡―『風土記』に載る、古代律令制から続く郡名である。近代の島根郡は、明治一二年に発足した行政区画。島根秋鹿意宇郡役所が松江城下に設置され、秋鹿郡・意宇郡とともに管轄。一方、松江城下町は松江市として独立し、郡と分離。この時、末次町の一部が松江市に編入。明治二九年、他二郡と合併して八束郡となる。現在、全域が松江市（大橋川以北）に属す。この書の通例として、近代以後の郡名を用いるが、松江城は現在の殿町（本書でも松江城の項目ではそうなっている）にあり、松江市の中心地である。したがって、この部分に限り、明治以後の末次村ではなく、もつと広範囲の、古代から漠然と称されてきた末次を用いたのであろう。島根郡もここに限っては律令制の島根郡。末次―『風土記』に、須衛都久社が見えるので、古くからおこなわれていた地名と思われる。須衛都久社自体は幾たびかの変遷を経て、現在の須衛都久神社（現西茶町）となった。鎌倉時代から戦国時代にかけて、この地に末次城（末次の土居）が置かれた。その場所については諸説あるが、龜山（今の城山＝松江城）にあったという説が有力、したがってその跡地に松江城が営まれたことになる。『懷橘談』にも、「府城」の条に、「末次はこの島根郡也。末次明神まします。……故に先の国主堀尾出雲守忠氏、富田の城をこの地へ移し、松江と名付けぬ」とある。中世には、末次荘なる荘園も設けられていた。現在は、松江市の末次町・末次本町・末次公園など狭い区画にその名を留める。堅城利兵―「堅城鉄壁」と「堅甲利兵」を合成した、おそらく造語。「堅城」、『韓非子』五蠹「万乘之国、敢えて自ら堅城之下に頼し而して強敵をして其の弊れを裁せ使むるは莫き也、此必ず亡びざるの術也」。「堅城鉄壁」と熟する例は中国にないようであるが、「金城鉄壁」は、例えば、宋の李曾伯・蘭陵王「天は金城鉄壁を設く」に見える成語。「堅甲利兵」は『孟子』梁惠王上「梃を制（掣）げて以て秦・楚の堅甲利兵を撻たしむ

可し」による。満山皆楓樹ニシテ以下、齋藤拙堂「箕面山に遊んで遂に京に入る記」に、箕面の瀧安寺周辺について、「満山皆楓にして、爛然として霜に飽き、色は渥丹の如し、水巖之間に綺錯す」と述べているのをほぼそのまま用いている。この拙堂の文も、中国の古典を巧妙にちりばめている。白居易・梨園弟子「満山の紅葉宮門を鎖す」。卿雲歌「明たる上天、爛然として星は陳ぶ」。劉禹錫・楊八敬之の絶句に答う「霜に飽く孤竹は声偏えに切なり」。『詩経』・秦風・終南「顔は渥丹の如き、其れ君也る哉」。黄滔・花「道う莫れ顔色渥丹の如しと」。中国の「楓」は、日本のカエドと種類は違うが、葉の形はよく似ていて、秋紅葉するので、カエドと訓じられるようになった。『阮籍』・詠懷第十三首「湛湛たる長江の水、上に楓樹の林有り」。「爛然」は、鮮やかにかがやくさま。ただ、燃えて焼きただれたような、というニュアンスで、齋藤拙堂は使っているような気がする。「霜に飽く」の前にこの語が副詞として来るのは、少しそぐわない。「渥丹」は、光沢をもつ赤色。丹砂（硫化水銀）に十分に浸して（渥）、濃い赤に染めるのでかくいう。この語は、『詩経』では、高貴な人の顔色のたとえだが、広く一般に赤いものについていうようになった。高秋―本来は秋たけなわの季節。中秋晩秋。「天高く馬肥ゆる秋」のように、晴れ渡って空の高く見える秋の意味に広がった。宋子侯・董嬌饒「高秋八九月、白露変じて霜と為る」。沈約・休沐、懐いを寄す「臨池溽暑を清め、幌を開きて高秋を望む」。名士―著名な人物。学問・詩文で名声のある紳士。地方の名士というような狭い意味で使っているのではあるまい。『呂氏春秋』尊師「此に由り天下名士の頭人と為り、以て其の寿を終う」。中国では、名声がありながら役人にならず、隠遁する人というニュアンスがある。『礼記』月令「(季春之月) 諸侯に勉め、名士を聘き、賢者に札す」。その鄭玄の注に、「名士は仕えざる者」とある。ここも、世俗に恬淡として、自然を愛する風流な人士という気持ちがあるのかもしれない。

\* 齋藤拙堂の文章によって、関西の僻地の箕面の滝及び紅葉は、観光地点として全国的に有名になった。星野文淑は、齋藤拙堂の箕面の紅葉礼賛の文章を利用して、月山の秋を観光資源化しようというつもりだったのだろう。荒城を前に、往時をしのぶにも、寂寥感の増す秋がふさわしい。ところが、歌人、俳人たちは、彼の思惑をおそらくわざと外して、主に春を詠んだ作品を寄せている。意地悪といえ、意地悪だが、ユーモアも感じられる。

子規はととぎす鳴なくてふ富田とみだの月山つきやまは花はなに雪ゆきにも名なくはしき哉かな

【訳】今は春だが、もう初夏のようにほととぎすが鳴いていると聞く、富田の「月山」だが、ホトトギスが鳴く夏、月の美しい秋だけではなくて、春の桜花、冬の雪に取り合せて詠むのもなかなか美しいひびきがあるのですよ。

【注】子規—ホトトギス。カッコウ科の鳥。アジア東部で繁殖し、冬は東南アジアに渡る。日本には初夏に渡来。キョキョキョと鋭く鳴く。和歌では、悲痛な鳴き声として詠まれることが多い。『古今集』「夏山になくほととぎす心あらば物思ふ我に声なきかせそ」。俳諧では夏の季語。山口素堂「目には青葉山ほととぎす初鰹」。鳴てふ—源俊賴「ほととぎす汝が兄弟（かぞいろ）のうぐひすに稀に鳴くてふことならひそ」。「てふ」は「といふ」の縮約形で、伝聞の意だが、動詞を柔らかくあとに続ける働きがある。名くはし—名が美しい。よい名である。名高い。濁らず、「なくはし」とも。上代語。『万葉集』三〇三「なくはしき印南の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は」。『万葉集』五二「なくはしよしののやまは」。「くはし」は、（繊細で）美しい。ここでは、名前自体が美しいというよりも、名前を花や雪と取り合わせると美しい、または、名前が花や雪にもふさわしいという方向で、「名くはし」を使用しているのではないか。  
\*道元「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり」を意識するか。いずれにせよ、春夏秋冬、雪月花をすべて詠みこんだ言葉遊び、おふざけの面が強い。月山だから、月を詠んで、季節は秋を詠んでくださいという、星野さんのご依頼だが、ホトトギスが鳴いているといっても、今は季節は春だし、月山は、四季全部が素晴らしいんだから、無視して、好きなように詠みましょう、皆さん、という歌会開頭の歌だと思うが、いかがであろうか。それに賛同する詠み手もいるし、律義に依頼を守る詠み手もいる。

いにしへの旗手はたてもかくや靡なびきけん月つきやまさくらあらし吹かなり

【訳】昔の戦いでも、軍旗がこんな風になびていたんだろうか。月山の桜に嵐が吹いているのである。

【注】旗手―長旗の風に翻る先端。はたあし。大観本謡曲・木曾「山鳩翼を並べつつ、味方の旗手に飛びかけり」。浄瑠璃『ひらがな盛衰記』一「西へ西へとなびく旗手（ハタテ）に」。近世軍記物の常套句のようである。したがって、古語ではなく、和歌には用例を見ない。富田城攻防戦を描くためにわざと軍記物の言葉を用いたか。もちろん、「はた」を「はたて」と三字に引き延ばすためでもある。「旗」に対して、「旗手」は、厳密には旗の先端をさすが、ここは軍旗全体を指していると考えたい。眼前の桜全体を旗と見なしたのである。或いは、しだれ桜のような桜で、梢のみ揺れるような情景を想像すべきなのかもしれないが、あまり言葉の使い方に厳格性を求めるべきではあるまい。なお、『日国』「はたあし」の項は、「長い旗の風に翻る末端の部分。旗手（はたて）。『書紀』雄略八年二月（前田本訓）「此の時に当りて綴（か）か）れる旒（ハタアシ）の若（こと）くにあり」。十卷本和名抄五「幡 旒附 唐韻云音流 波大阿之 旒旗之末垂者也」とあり、こちらの方は古語であろうが、和歌ではやはり用例を見ない。また、『日国』旗の「はた の て」の項には「旗の上部、旗がしら。『承久記』上「一町とも旗の手の靡かぬ所は候はず．．．」とあり、「靡く」とともに用いられているが、これも旗の部分にこだわるべきではなく、旗全体を指しているものと思われる。月やまさくら―江戸末期の松江藩歌人、森為泰に、「月山の桜を思ひやりて広瀬なるはらからのもとへ遣はしける 春の夜の月山さくら此ころは花もおぼろにさぞにほふらん」（『類題和歌集』）の一首がある。「月山桜」はすでに熟した語となっている。「遠山桜」「深山（みやま）桜」等の歌語に倣って作られた合成語であろう。『玉葉集』「春霞あやなたちそ雲のゐる遠山桜よそにても見ん」。『源氏物語』若紫「優曇華の花待ちえたる心地して深山桜に目こそうつらね」。あらし吹なり―津守国基「山川にしがらみかけよ龍田姫峰のみみちに嵐吹くなり」、能因法師「嵐吹く三室の山のみみぢ葉は龍田の川の錦なりけり」、藤原家隆「梢より誘ふに飽かで桜花散り敷く庭に嵐吹くなり」。北島三綱の作は、嵐が吹いて花が散るというパターンを破ったところに新味がある。「なり」は断定の助動詞。

\* 前首を受けて、眼前の桜を歌う。いくさを歌うのは、本当は風雅な和歌にふさわしくないが、そこをあえて歌う。荒廃した城跡の桜に過去の幻影が浮かんだことに興趣を覚えている。桜を旗に見立てるのは奇抜。

勝日山勝声かつひやまらちこえあけした、かひの昔をしまたずおそおもふ弓むかしはりの月つぎ

【訳】勝日山で勝利のときをあげた、戦争のむかしのありさまが思い描かれる。この弓をはったかのような三日月をみていると。

【注】勝日山―月山古名。次の「勝声」を呼び起こす。勝声―関（とき）。戦争で勝ちを収めた時のかちどき。例えば

「えい、えい、おう」。山部赤人「朝風にかちこゑ（但し原文は「梶音」）聞ゆ御食つ国野島の海人の船にしあるらし」。あけし―「声」を「あげ」るはあまり歌語としては使わない。定家「待たれつる月もはるかに鳴く鶴のこゑあげがたき長き夜の霜」。昔をそおもふ―「難波江や風吹きすさぶ蘆の葉にすみうかりけむ昔をぞ思ふ」。弓はりの月―弓

を張ったような形をした月。上弦、または下弦の月。弦月。小宰相「敷島や高円山の雲間より光さしそふ弓張の月」。

\*月といつても、秋とは明言していない。前首を受けて、尼子が富田城包圍戦に勝った時のことを思いやる。それも、一時のことで、結局滅亡の悲劇が待っているのだが。弓張月といえば、尼子十勇士の筆頭山中鹿之助が、三日月の前立てに鹿の角の脇立てのかぶとを用いていたことや尼子家再興のために「願わくば我に七難八苦を与えたまえ」と三日月に祈った逸話が有名。ここはそれを意識しているのかもしれないが、星野文淑の説明にも、他の作品にも触れていないので、関係ないのだろう。山中鹿之助の物語は、あまりに俗で、和歌の材にふさわしくないと判断したか。山中鹿之助は江戸期から人気があったはずだが、本格的な顕彰は明治以後に始まるようである。

富田山とくだやまの昔をむかしとへは武士たけだみちとじの月つきにあそひし跡あとをせ残れる

【訳】富田月山の昔をしのぼうと訪ねてみると、武士たちが、月を見ながら風雅な遊びをしただろうあとが残っていた。

【注】富田山―月山。昔をとへは―藤原家隆「梅が香に昔をとへば春の月答へぬ影ぞ袖に映れる」。こここの「とふ」は、「訪ふ」、訪れるの意味であろう。武士―もののふ。朝廷諸官（及びその氏族）をさす「物部」に由来するという説が

ある。歌語としては、多数を示す言葉に先行する枕詞として使う場合が多い。柿本人麻呂「もののふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行く方知らずも」。大伴家持「もののふの八十少女らが汲み紛ふ寺井の上の堅香子(かたくり)の花」。王朝和歌が武士自体を詠むことはまれであるが、武家の源実朝のように、「武士(もののふ)の矢並つくるふ籠手の上に霰たばしる那須の篠原」と、わざともののふを武士の意で用いることもあった。あそひしー「あそぶ」は、古語では、詩歌を作ったり、音楽を演奏したり、歌舞をしたりして楽しむことを言う。『枕草子』御仏名のまたの日「ひとわたりあそびて、琵琶弾きやみたる程に・・・」、『源氏物語』桐壺「月のおもしろきに、夜更くるまであそびをぞし給ふなる」。『玉葉集』「もしきの大宮人の立ち出でてあそぶ今宵の月のさやけさ」。跡ぞ残れるー『続千載集』「白雪の布留の中道なかなかに訪ふ人つらきあとぞのこれる」。『歌枕名寄』「大井川同じ流れのかわらぬに古き御幸のあとぞのこれる」。現在の月山には山中御殿と呼ばれる巨大な建造物の石垣及び平地が残っている。そのあたりを詠んでいるのであろうか。また、尼子晴久の時代に、都から連歌師を呼んで、以後連歌がさかんになったという(『広瀬町史』)。

\*これも秋を明言はしていない。富田城を守る武士たちも、無骨一辺倒で戦いに明け暮れていたのではなく、今歌会を楽しむ我々のように、月を見ながら風雅な遊びをしたのだらうと、おりしも空に浮かんでいる月を見ながら、思いにふけたのであろう。

49

長谷川龍衛

た、かひし太刀の光とさゆるかな勝日の峯の秋のよのつき

【訳】この城で戦った武士たちの持っている太刀の光が思い浮かぶようにさえわたっている、勝日の峰の秋の夜の月は、  
 【注】光とー「と」は、・・・のように。引用の助詞から、比喩を示すようになった。さらには、「といいかくい」や「ともかくも」のように、副詞的用法にも広がる。さゆるー冷たく凍るの意から、月光などが白々と冷たく輝くさまをいう。慈円「大江山かたぶく月の影冴えて鳥羽田の面に落つるかりがね」、源兼昌「長月の月の光のさゆるかな桂が枝に霜や置くらむ」。秋のよのつきー刀の光を思わせるのは、やはりさえずえとした秋の月でなければならぬ。古今集「白

雲に羽打ち交わし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋のよの月」。藤原長能「都にも人や待つらむ石山の峰に残れる秋の夜の月」。  
\*この首に至って初めて「秋」字を用いる。星野文淑の依頼にも少しはこたえたか。前首のように、月を前にして、風雅を詠むのではなく、今度は武士らしい武士を歌う。月から、「たたかひ」や「太刀」が連想されるのは、非常に殺風景である。

50

北島湊きたじまみなと

もの、ふの花はなと散ちりしはむかしにて月山つきやまさくら嵐あらしふく也なり

【訳】武士たちが桜の花のように潔く命を散らせたのはもう昔のことになってしまった。この月山のさくらに嵐が吹きすさび、花が散っている情景だけが目の前に残っている。

【注】もののふ―前出。花と散しは―「と」は「・・・のように」。「花と散る」は、武士の潔さを言い表すのに好まれる表現。ひとつ残らず、あとかたもなく、消失してしまう。『古今集』「我のみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花と散りなば」、道真「花と散り珠と見えつつあざむけば雪降る里ぞ夢に見えける」、蓮生「吉野川滝の上なる山桜岩越す波の花と散るらし」。むかしにて―藤原顕忠母「鶯の鳴くなる声は昔にてわが身ひとつのあらずもあるかな」。月山さくら嵐ふく也―46北島三綱の下二句と全く同じ。

\*また、春に戻る。おそらく近親者目上の北島三綱の句をいただいて、まねてみた。同じ二句を使いながら、三綱の作品は、意気軒高な武士及び旗に、まだ散らぬ盛りの花を配しているが、湊は、時が過ぎゆき、武士たちが自刃、富田城が落城したことに、花が散ったことをあつらえているところが妙である。

51

細野安恭ほそのやすゆき

春はる過すて花はなも匂におはぬ月山つきやまに古ふるき昔むかしをよふ千鳥ちどり哉かな

【訳】月山は、春が過ぎて、花も散り、匂いもしなくなり、殺風景である。だからこそ、往時を呼び寄せるように、千鳥が「ち

よちよ、「千代八千代」と鳴いている声が心にしみわたる。

【注】春過ぎて―持統天皇「春過ぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天の香久山」。花も匂はぬ―伊勢「春がすみ立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる」を意識するであろう。花に興趣を感じない雁と違って、千鳥は春どころか、夏になっても、相変わらず、月山に懐古の興味を持ち続けているので、いつまでも月山に居続けるのである。

古き昔―『古今集』「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を意識するだろう。春の花はもちろん、夏の花も咲かない、だから、『古今集』は昔の愛人のことだが、拡大解釈して「昔をしのぶすがもない」と思っていたところに、千鳥が鳴くのである。「にほふ」は、本来は視覚的に映える意だが、平安時代に現代の嗅覚としてかおるという意味が生じた。『古今集』「人はいさ心も知らずふるさと花ぞ昔の香にほひける」も、この作品の発想の源であろうか。古き昔―正徹・橘薫枕「橘はちかき若木ぞうぬ世の枕やふるきむかしなるらん」。「古き」と「昔」と同意語を重ねることによって、昔と今との隔絶をより強める。よぶ―一人では寂しくて、誰かを呼び寄せよせようとするニュアンスがある。自己の寂しさと尼子の武士たちに対する追念の情を、千鳥に投影しているのである。大神女郎「さ夜中に友呼ぶ千鳥もの思ふとわびをる時に鳴きつつもとな」。和泉式部「彼を聞け小夜更けゆけば我ならで妻呼ぶ千鳥さこそ鳴くなれ」。千鳥―チドリ科の鳥ではあるが、水辺を好む習性などは、この歌で考える必要はなく、「千」羽も群れるような小鳥で、ちよちよ（千代八千代）と鳴くということをおさえておけばよいだろう。『古今集』「しほの山さしでの磯にすむ千鳥きみが御代をば八千代とぞ鳴く」。西園寺公相「夕されば塩ひのかたになく千鳥声をば千代に八千代とぞ鳴く」。悠久の時間を呼び起こす鳴き声である。そして、柿本人麻呂「近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしものいにしへ思ほゆ」以来、その鳴き声は、孤独な人に過去を思い起こさせる力を有するものとして詠まれる。群れて鳴くので、より聞くものの孤独感が増す。源兼昌「淡路島通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守」、藤原秀能「風吹けばよそになるみのかたおもひ思はぬ浪に鳴く千鳥かな」。

\*眼前の春夏の交の情景に戻って歌会を締めくくる。花が散る春や月が照る秋でなくては、懐古の興趣を詠めないわけではない。ホトトギスはすでに鳥重養が言及したし、寂寞懐古の情を催す悲しい声としてあまりにステレオタイプなの

で、自分は千鳥を題材にしようとしたのか。千鳥は俳諧の季語では冬。芭蕉「星崎の闇を見よとや鳴く千鳥」。これで、和歌の方は、春夏秋冬四季が一応そろったことになるが、星野文淑が強調した月山の紅葉は結局誰も詠まなかった。

52 安来 芋村

その声やさすか吐月の郭公

【訳】吐月峰で鳴くホトトギスの声は、うわさ通りなるほど凄惨な響きだ。まさに、泣いて血を吐くホトトギスとはこのこと。吐月と聞いて、吐血が連想される。

【注】安来 芋村『安来町史』に「(山内) 曲川翁の弟子筋に：・灘紺屋の富田芋村」とある。『風流新誌』第一号「年越して又山のある寒さかな 芋村」。その声や「その」は単なる指示代名詞ではなく、今聞いているほかでもないこの声。一回性、現前性を強調する。柿本人麻呂家集「佐保川に遊ぶ千鳥の小夜更けてその声聞けばいねられなくに」。さすか「さすが」は古典では「そうはいうもののやはり」という逆説的な意味だが、ここでは、「なるほど(思っていた通りだ)、やはり(聞いていた通りだ)」の近世俗語として使っている。俳諧にふさわしい措辞。吐月―月山の頂上は吐月峰と呼ばれた。吐血に掛ける。白居易『琵琶行』「杜鵑は血に啼き猿は哀しく鳴く」をもとにしてできた「啼いて血を吐くホトトギス」の言い回しを織り込んでいる。梁・宋懐『荆楚歲時記』に引く注にも、「此の鳥啼いて血の出づるに至り、乃ち止む」とある。

\*季語は郭公(夏)。庶民の文学である俳諧は、廢墟を前にした幻想や、武士のことなどは詠まぬ。むしろ開き直って談林調のダジャレを楽しむ。「さすが」の措辞など、俗っぽさが身上。

53 松江 百喜

月山も花の七日のくもりかな

【訳】この月山、桜は七日しか持たないというのに、あいにくの曇りで花も月も楽しめないのが残念だが、これも興趣

のあることではある。

【注】松江 百喜一不明。『風流新誌』第一号に「待た日のかけにや咲いて福寿草 百喜」が掲載。山内曲川の弟子の人だろう。花の七日―花七日は、桜は咲いてから散るまでが七日間に過ぎないということ。盛りの時期の短いことのとえ。西行『思ひやる高嶺の雲の花ならば散らぬ七日は晴れじとぞ思ふ』。この西行の歌を意識しているとすれば、月山を覆う雲全体を花と見立てているのかもしれない。もちろん、雲の下には、花が咲き、散っている。芭蕉「花咲きて七日鶴見る麓哉」。『新続犬筑波集』「花盛りいかで七日をきりかやつ」。花が散り、月が曇るのを悲しんでいるだけではない。兼好『徒然草』「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」や芭蕉「名月に麓の霧や田のくもり」のように、曇る月や散ってしまった花を羨しむ伝統があった。花曇り、朧月も愛されてきた。蕪村「花ぐもり朧につづくゆふべかな」。  
\*季語は花（春）。前句に対して、穏やかな調子。掛詞等のけれんみもない。月と花という、俳諧連歌で重要な景物がここ月山では味わえますよ（たとえ天気が悪くても）、という宣伝にもなっている。結局、俳諧の方でも、星野文淑の意図に反して、秋の月山やその紅葉が詠まれることはなかった。星野と親しい漢詩人のグループなら、秋の詩、紅葉の詩を寄せてくれたかもしれない。さらに、頼山陽以来、よく題材にされる、山中鹿之助に触れる詩もあったかもしれない。倉卒に出版を急いだようで、本書には、いろいろな手落ちがみられるが、この項については、編者と選者・作者との、芸術観・歴史観のくいちがいがあると見られ、興味深い。

○犬石いぬいし

意宇郡おうぐん、白石村はくしむらニアリ。長サ一丈ながいちじょう、高サ四尺たかしやくしゆ、周回一丈九尺しやくしゆうかいいちじゅうきゅうてくノ石ニシテ、大己貴命おおなむちのみこと猪ヲ逐フ時おおうとき、率ひきユルトコロノ犬いぬハ、則チ是レナリすなわちこゝに。今日ニアリテこんにち、猶ホ其形ヲ損セスなほそのかたちをえ。廻ラスニ石垣いしがきヲ以テスもち。

【訳】犬石は意宇郡白石村にある。長さ一丈（約三・〇米）、高さ四尺（約一・二米）、ぐるりが一丈九尺（約五・八米）の石で、オオナムチ（大国主命）がイノシシを追跡したときに、連れてきた犬が化したのがこの石である。今なお、犬の形は崩れずにそのまま残っており、周りは石垣で囲んである。

【注】 犬石―本項目は二つ前の猪石と連続するべきであるが、間に月山城墟が挟まれているのはなほだ不審。病弱な星野文淑が本書の出版を急いだらしい形跡があり、原稿未整理のまま、書店が本人の校閲を経ることなく、そのまま出版してしまったか。犬石は、石宮神社（現松江市六道町白石）。本殿裏の石の柵に囲まれた犬型の石に比定される。先述のごとく、神社の入り口には、巨石が数個あり、これらを『風土記』の猪石に比定する説もある。本殿は後から作られたもので、江戸期には犬石の周りを、石の柵で囲むだけだった。明治五年村社に列せられ、四十年他神社を合祀して社殿を新築したという（『六道町史』）。本書成立の時期には、まだ社殿は整っていないかかったのではないか。挿絵の犬石の図にも、樹木が背景に描かれるのみである。もつとも、この挿絵には問題があつて、石の形は現在のものとよく似ているが、石垣が描いていない（現在も古い石垣が残っている）。犬石を置く石積みの高い台（よく、神社で狛犬が置かれているような）が描かれているが、現在は砂利を敷いた平地があるだけである。改築や廃棄をしたように見えない。やはり、挿絵作者の妹尾春江は、現地に行つたことはなく、人づての情報で描いているように思われる。星野文淑も、チェックする余裕がなかつたようである。白石村―先に述べたように、明治二十二年、六道村に編入されるが、江戸時代から、村名（地区名）はあつたであろう。おそらくは犬石・猪石（どちらも白色）に由来するのではないか。なぜ、「はくいし」と読むかは不明。長サ一丈―猪石の項と同様、『風土記』をほとんどそのまま写している。こちらも、訳では、メートル法に換算して概数を示した。犬石の場合は、実物は数字よりかなり小さい。現在の犬石とは違う（例えば、神社の入口の巨石）、『風土記』の度量衡が特殊である等の可能性が考えられるが、『風土記』の記述はそれほど厳密なものではないと思う。率ユル―歴史的仮名遣いは「ひきゐる」が正しい。「もちゐる」同様、「引く」と「ゐる」（これも引く、引率するの意）の合成語。しかし、中世以後は、原義は忘れられ、音韻が変化し、「ひきゆる」等の表記が現れるようになった。猶ホ其形ヲ損セス―『呂氏春秋』孝行「其の身を虧かず、其の形を損せずんば、孝と謂ぶ可し矣」。廻ラスニ石垣ヲ以テス―西陽雜俎（卷十八）「無憂王因りて懺悔して灰菩提樹と号し、遂に周らずに石垣を以てす」。漢文としては、普通は「周」を用いるようである。

大神おほのみの御狩みかりの幸さちをか、ふりて犬いぬはときはの石いしとなりけむ

【訳】オオナムチの神（大國主命）がご狩猟遊ばされたのにお供したおかげをこうむって、犬は永遠の命を持った石となったのであろうか。

【注】大神、御狩―猪石44島重養和歌の中で先述。「幸」、「かがふる」とともに古代風を醸し出す言葉。幸―さち。幸福、恩沢の意味でよいであろう。『続日本紀』天応元年四月十五日宣命「凡そ人の子の福（さち）を蒙らまく欲りする事は、おやのためにとなくも聞しめす。自然からとれる産物、獲物、収穫。古事記に「海幸彦 山幸彦」。本来は狩猟漁撈における獲物（または獲物を捕る道具）が原意。もしそうならば、神である大國主命が狩った特別な神獣である猪を褒美でいただき、食したことによって、その霊的エネルギーを得て、永遠の生命を得たという解釈になろうか。か、ふりて―後世、「こうむる」「かぶる」「かんむり」などに転化した古代語。承る。こうむる。特に、命令や恩沢を受けらる。『万葉集』四三三二「恐きや命かがふり」。ときは―常盤。「とこいは（常に存在し続ける岩）」がつづまったことば。岩に限らず、永遠なるもの一般を指すが、ここは原義が残っている。大江匡房「君が代の常盤の石は天下る乙女の袖もいかが撫づらむ」、藤原行家「君が代は動きもあらじ苔のむす常盤の石のいつもときはに」。石となりけむ―太皇太后宮小侍従「逢ふことの難き嘆きに恋ひ死なば我もや野辺の石となりなむ」とうたわれるように、夫の帰りを待つて妻が石になってしまう「望夫石」の故事は歌によく詠まれる。それに対して、なんと犬が石となったとは、という驚きがこめられている。

\*神話は、後世の一般人には何のことやらわからない。理屈が通らない。そこが恐ろしいし、魅力的でもあるところだ。主人のために尽くした犬がなぜ石とされてしまうのか。不条理である。永遠の生命を褒美にいただいたのだという解釈で何とか理解しようとするのだが。末句は、過去推量の助動詞「けむ」で結んでいる。例えば浦島太郎の結末のように、不可解な気持ちさが後を引く。

猪おひて石となりけん犬像のいはほそ里のまもり也いぬかた いわおせさと

【訳】 いのししをおつけて石となつたそうな、犬の形をした大岩が、この里を守る守護神となつたのである。

【注】 石となりけん―前首末二句の繰り返し。ただし、「けん(む)」は、連体形とみて、「(犬像の)いはほ」にかかつてるように読むべきであろう。いはほ―「石」と大小の差はあつても、同義語で、重複しているのは拙いようであるが、おそらくわざと。国歌君が代のもととなつた、『古今集』「我が君は千代にやちよにさざれ石の巖となりて苔のむすまで」が念頭にあるだろう。同義語の重複に、伝説上の「石」が、巨大な「岩」として目の前にありありと現れているという感動が込められている。君が代と発想は違うが、時間の流れの悠久さに対する感慨も表現している。まもり―本来は、「目(ま)守(も)る」の意。見守ることから、外敵の侵入を防止、監視する意味に広がった。「まもり」はその連用形が名詞化したもの。小野好古母「垂乳根の親のまもりと相ひ添ふる心ばかりはせきなどどめそ」。「もる」がそもそも注意して見張る、番をする意味。『古今集』「山田もる秋のかりいほに置く露は稲負鳥(いなおほせどり)の涙なりけり」。犬石も、外敵防御の神として里人から崇敬されているといふことであるが、現代語の「見守る」程度に目立ったことはせず、じつと優しく守護しているという方向で読むべきかもしれない。『統千載集』「昔より御国はるかに伝はれる法ぞこの世のまもりなりける」。

\*前首の不可解に対する一応の答えになつている。前首の「石となりけむ(ん)」をわざとそのまま用いている。異常なことだが、結果として、犬は神秘的能力を得て、今もこの村を守ってくれているんだと、いわば強弁して納得する。神秘的な次元から、眼前の平穏な世界に戻つて、締めくくる。

本稿は、

鳥根大学法文学部山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

近代山陰の政治と文化―「渡部寛一郎関係文書」・「若槻礼次郎関係文書」に見る漢詩と政党政治の関係分析を通して

— (課題番号 一六一— 期間 二〇一六～二〇一八年度 代表 要木純一)  
1611

及び、

科研費 基盤研究 (C)

近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境—中国文学と日本史学の学際的研究 (研究課題\領域番号  
16K02366 期間 二〇一六～二〇一八年度 研究代表者 要木純一)  
による成果の一部である。